KANAGAWA
NEWS LETTER 2019. 2. No. 44
〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1 電話 (045)481-5661(代) 神奈川大学言語研究センター

グローバルでローカル、芸術の町アシュランドに滞在して

大島 希巳江

2018年4月から在外研究の機会をいただき、アメリカはオレゴン州のアシュランドという小さな町に滞在している。オレゴン州最南端の町で、カリフォルニア州との州境までほんの20キロほどである。オレゴン州の主要都市よりカリフォルニアのほうがよほど近い。シスキュウ山脈、カスケード山脈などの山々に囲まれたローグ渓谷に位置し、多くの国立公園に囲まれた自然にあふれた町である。このような釣りとキャンプとハイキングしかできない町になんの研究にきたのか、と思われるかもしれない。確かにアウトドア派である我が家のメンバーにはぴったりの町であるが、なんといってもアシュランドといえば国際的に評価の高いオレゴン・シェイクスピア・フェスティバルの開催地である。

長い伝統のあるこのフェスティバルでは、毎年2月から10月末まで毎日、町中にある数十か所の劇場で数多くの演劇やミュージカルが行われている。世界中から著名な俳優やミュージシャンが数百名やってきて1年間町に滞在し、その年のフェスティバルに出演する。私にとってこの町に住むことの醍醐味は、なんといってもこれらの俳優、音楽家、監督、デザイナーといったプロが舞台の合間に開いてくれるワークショップを受講できることである。今回の在外研究のテーマ、インプロビゼーション（即興劇）のワークショップも数多く受けることができた。即興力のトレーニングがいかにコミュニケーション力と言語運用能力を向上させることにつな

オレゴン州アッシュランド（町）

がるか、という研究が私の主なテーマであるが、演劇指導を長く続けてきた即興のプロフェッショナルたちが同様のテーマで一般向けにワークショップを行っていることは大変に興味深かった。長期にわたってディスカッションを重ねる機会に恵まれ、大変に有意義な時間を過ごしている。

オレゴン・シェイクスピア・フェスティバルという名で知られてはいるが、実はシェイクスピアばかりを演出しているわけではない。アメリカの現代演劇もあるし、日本の時代劇もある。私も英語落語を披露する機会に何度か恵まれた。このような演劇・芸術の町であるからダウンタウンの雰囲気もちょっと変わっている。自由でアーティスティックな服装、髪型、思想の人々が多い。ハロウィーンのパレードなどは、プロの衣装デザイナーやメイクアーティストが本気で参加するので、太刀打ちできないほどのド迫力。子供たちは容赦なく泣かされるはめになる。

多民族社会アメリカであるはずだが、この町は92%ほどがいわゆる白人ヨーロッパ系であり、3%がヒスパニック系、2%がアジア系、その他の中にアフリカン・アメリカンやネイティブ・アメリカンがそれぞれ1%に満たない割合である。観光客と舞台関係者が多いので、多種多様の人々が混在している雰囲気はあるが、地元に住む人々はそうでもない。子供たちの通う小学校では、我が家の二人が唯一のアジア系である。地元の郵便局では東京に荷物を送ろうとしたとき、「日本に東京という名の都市はない。中国の間違いではないか」と係りのおっちゃんに真顔で言われ、ひっくり返りそうになった。さんざん議論した挙句、やっとパソコン上でTokyo in Japanを見つけて納得してもらい無事に発送することができた。なぜ東京の位置について日本人の私に挑みかかるのか、わけがわからない。それくらい、アジアにはなじみのない人々の町である。

それも悪いことばかりではない。リベラルなリゾート地であるために、日本食は人気があり高級日本食レストランも多い。しかし、日本を知らない人がほとんどなので日本食のクオリティが低い。小さくてべちゃっとした味気のない餃子が5つで12ドル、乾いたサーモンとアボガドの海苔巻きが一本18ドル、主婦感覚満載の私の財布は当然貝のように閉じてしまうが、これがこの町では当たり前。そのため、私が作ってふるまう餃子やのり巻きは大学でもご近所でも絶大な人気である。普通に簡単な日本食作るだけでこんなに喜ばれるとは。楽勝。

森の中にたたずむ南オレゴン州立大学の図書館

そんな観光地アシュランドの主な収入源はなんといってもこのフェスティバルを目当てにやってくる観光収入で、シーズン中は町の人口以上の観光客であふれかえっている。市内にあ

る南オレゴン州立大学とアシュランド高校のいくつかの劇場でも学生たちがミュージカルを披露するが、学生とはいえアメリカ全土からやってくるセミプロのような学生ばかりで、入場チケットもしっかり100ドル近くするのである。確かにその価値があるだけのレベルの高さである。おそるべき演劇の町、アシュランド。

キャンパス、街中、我が家の庭まで出没する野生の鹿

南オレゴン州立大学でもTheater専攻の学生に落語のスキルを教える授業を依頼され担当しているが、日本の文化や歴史については彼らは何も知らないので楽勝である。何をレクチャーしても、ほほー、と感心して喜んでくれる。しかし、落語についてはちょっと演じていくつかのスキルとその背景を説明すると、あっという間にできてしまう。セリフやジェスチャーのアレンジも上手い。声の質も抜群、話し方や惹きつける力、間のとりかたも絶妙である。普段からチケット代をとって舞台に立っている学生たちであるから、レベルが高い。これはまずい、すぐに追いつかれて追い越されてしまう。ちょっとペースを落として教えなければ。まずはちゃんと正座できない人から厳しく指導し直そう。とこっそり考えている。

在外研究のテーマとは別に、私の専門分野である異文化コミュニケーションと社会言語学という観点からも無視できない出来事が満載の毎日である。たとえば、家の中で靴を脱ぐという習慣の家庭が圧倒的に増えたという印象がある。ご近所、子供たちの友人宅、同僚などのお家に招かれてお邪魔したが、25軒中21軒は家では靴を脱いでくださいね、という習慣であった。20年以上前、学生の頃にアメリカのコロラド州に住んでいたが家の中で靴を脱ぐなんて、あり得なかったものである。ベッドルームに入ってはじめて靴は脱いだものだったが…。それにともなって家の造りも変わってきているようである。要するにフロントドア付近に、靴を収納する必要性が出てきて、それができない家はガレージの中にシュークロゼットを造り付け、結果的にガレージがメインの出入り口に代わっているという変化が見られる。文化的習慣の変化が物理的文化を変化させている一つの例である。

また、この地域特有なのかどうかわからないが、ランチをきちんと食べるという習慣がない。これに慣れるのには時間がかかった。午前11時から午後1時までの集まりでもクラッカーとチーズが並んでいるだけだったり、1時半に集合して2時にサンドイッチとカップケーキが出たりする。5時に集まればもうワインとビールとBBQ。要するに、午前中の後半から夕方あたりまで、少しづつだらだらとずっと食べ続ける、という感じである。小学校でも子供たちはランチというより、スナック（リンゴやブドウ、ナッツ類、クラッカー、ソーセージの薄切り、チーズ、などをそれぞれ小袋に入れてくる）をたくさん持ってきて休み時間や授業の合間にちょこちょこ食べている。朝昼晩、とがっつり三食食べるという体育会系の我が家はこ

れに慣れるのに苦労した。結局、常に何か食べ物を持ち歩くという習慣に現在は落ち着いている。

そのような習慣のせいか、こちらの学校は昼休みがとても短い。ある意味これは合理的である。昼休みを20分にして、ちょこちょこ食べを習慣とすれば、100分授業も問題ではないかもしれない。

英語に関しては、移民が少ないのであまり特徴のないアメリカ西海岸の標準英語を使っているという印象である。しかし、やはり若者は日本同様に勝手に流行言葉を作っては勝手に使い、大人たちに嫌な顔をされている。11歳の長男は“horrarious”という言葉を友人との間で数か月前から使い始めた。Horrible と hilarious をくっつけた造語で、ひどくて面白いことを意味するらしい。階段を踏み外して5段ほど転げ落ちたとき、いたずらして先生に怒られたとき、など痛々しくて嫌な思いをしつつも笑えるような時に That was horrarious! を使う。いかも少年らしい造語である。どうも多くの子供たちが使っているようである。また、大人には異様に聞こえる“my one”も最近は多くの子供たちが使っている。Hey, that's not your card, it's my one! のように使うのであるが、ご存じのように本来 mine であるところに使っている。不思議な変化である。特に都合がよいとも思えず、理由はわからない。大学生から20代前半の女子はやたらめったら“Perfect!”（しかもperfectのところを強調して伸ばしつつ語尾をぐいっと上げる発音）を使う。頻度が高いことと発音の特徴も併せて、中年以降の我々にはちょーっと耳障り…。「これカードで支払いたいのだけど」“Perfect!”「5時に部屋を予約できる？」“Yes, perfect!”「具合が悪いので明日はお休みしたいのですが」“OK, that's perfect!” なんでもかんでもパーフェクトはおかしいでしょ…。いまは中年の我々も20代のころはめちゃくちゃな若者言葉を作っては使っていたわけだから責める気はない。日本語でもそうだが、流行の言い方や若者言葉、新語は作られても定着するものと、すぐに消滅するものとがある。これらの言葉が今後どうなっていくのか、興味深い。すぐに消滅するかもしれないこれらの言葉をここに記録しておきたいと思う。

このような日々の細かい事情に気が付いたり気を配ったりする余裕があり、多くの貴重なワークショップや授業を受講したり、時間をかけてディスカッションをしたり、図書館にこもったり…、やってみたいと思っていたことが実現できているのも、すべて先生方と職員のみなさまのご理解をいただき在外研究をさせていただいているおかげである。この場を借りて心より御礼を申し上げたい。

ニジマスが釣れる近所の湖

音声研究と音声教育

小松　雅彦／相原　昌彦

言語教育において、これまで音声教育はあまり実践されてこなかった。しかし、2017年度には、日本音声学会から文部科学省に対して「指導要領に定める英語音声教育実現のための提言」が出され、また、文部科学省の「外国語（英語）コアカリキュラム案」には英文法などと並んで「英語の音声の仕組み」が明記された。本研究グループでは、幅広く音声とその教育について研究を行う。

本研究グループでは、5言語（イギリス英語、フランス語、イタリア語、ドイツ語、スペイン語）の音声データを含む多言語音声コーパスMULTEXT Prosodic Database（1998）のアメリカ英語版の作成を進めている。本年度は、昨年度収録したアメリカ英語音声とMULTEXTのイギリス英語音声の比較を、速度、リズム、イントネーションから行っている。分析データの量がまだ少なく断定的なことは言えないが、分析した範囲内では、イギリス英語とアメリカ英語はほぼ一貫してリズムを表す音声学的指標に差が見られた。主観的にイギリス英語の方が「テキパキ感」があるとも言われ（小川・マケックニー，p. 3）、それと関連している可能性がある。

—◆—

言語景観に関する社会言語学的基礎研究Ⅱ

尹　亭仁／彭　国躍

本研究グループの中国関連の研究成果は２つの面からまとめられる。

1つ目はこれまで収集された写真・映像データに基づいた論文の刊行と執筆である。すでに刊行された論文は以下のとおりである。

（１）「上海の都市形成期における言語景観 －歴史社会言語学の事例研究」『神奈川大学言語研究』（40）pp23～57，2018年3月。

（２）「百年前頃の上海の景観言語と景観文字の記述研究」『人文学研究所報』（59）pp73～98，2018年3月。

本年度は上記研究成果の続きとして、コロニアル時代における上海言語景観のタイポロジー関連の論文と、言語景観のミクロレベルでの通時的研究の論文を２本執筆中である。

２つ目は上海以外の中国各地の言語景観の歴史写真・映像資料の収集である。現段階ではかつての満州地域の写真資料を集めているところであるが、当時の満州の言語景観に現れる言語使用の実態と地域差の興味深い事実が一部浮かび上がってきている。今後資料収集が一段落したらデータ分析と論文執筆に移りたいと考えている。

一方、本年度の韓国語関連の言語景観研究では、東京、横浜、京都、長野、羽田空港などで採集した300枚以上の韓国語の写真の分類および分析を行なっている。＜図１＞と＜図２＞はハングルで

の表示がついている「案内」「到着」である。<図3>は「歓迎します」の意味の「환영（歓迎）합니다」である。いずれも、漢語動詞で、初級レベルでは出てこない単語である。しかし、このような言語景観を用いると、初級レベルでも簡単に導入することができるため、語彙力のアップにつながる。

<図1> 안내（案内）

<図2> 도착（到着）

<図3> 환영（歓迎）합니다

<図4>は「お菓子」、<図5>は「新聞・雑誌」、<図6>は「お湯」がハングルで表示されている。<図4>と<図5>は頻度の高い名詞なので、発音の練習と応用表現に用いることができる。<図6>は「뜨겁다」という形容詞の連体形の「뜨거운」である。韓国語の形容詞は日本語と違って終止形と連体形の活用形が異なるため、習得に時間がかかる。<図6>のように具体的な用法の提示により、従来より習得がスムーズにいくことが期待される。

<図4> 과자（菓子）

<図5> 신문（新聞）・잡지（雑誌）

<図6> 뜨거운 물

現在、300枚以上の写真を韓国語の文法項目に合わせて、初級と中級のどのレベルで提示したらいいのか、分類・分析の作業を行なっている。このような日本での資料を韓国語教育に生かす方法を摸索する傍ら、漢字文化圏のソウルと北京での言語景観との比較も試みている。

－◆－◆－◆－◆－◆－◆－◆－◆－◆－◆－◆－◆－◆－◆－◆－◆－◆－◆－◆－

レアリア学習からみた外国語学習語彙の研究

堤　正典／小林　潔

この共同研究では、これまでのロシア語のレアリア（文化的背景などの知識）の教育についての研究する過程において、学習語彙の見直しをすることの必要性が浮かび上がり、ロシア語の学習語

彙の再検討を行っている。

ロシア教育科学省認定ロシア語試験（ＴＰＫИ）の学習語彙を基盤とするが、それは主としてロシアへの留学生が必要とする語彙を中心としているので、日本人がロシア語を使用するその他の様々な場面を想定して、ＴＰＫИ学習語彙に含まれない必要な語彙の洗い出しを行い、学習語彙リストの改訂を目標としている。

なお、ロシア語はロシア理解やロシアでの生活の手立てであることは事実であるし、ロシア語の用法はなによりロシア語話者のロシアでの生活の中で生まれるものである。ロシアという国自体も、内外の非ロシア語母語話者にさまざまなロシア語能力を求めていて、各種の試験やロシア語教材という形で提示している。かかる事情を念頭に、日本人学習者の視点から、ロシア本国のＴＰＫИ以外の試験や教材の検討も続けている。

また、語の多義性に注目し、日本語を母語とする学習者（日本人学習者）のためにロシア語学習語彙についての日本語との対照分析を行っている。多くの語は多義であり、その個々の意義（意味）はメタファーやメトニミーなどの関連をもち、ネットワークを形成すると考えられる。それぞれの語について、そのようなネットワークを明らかにすることが目的となる。例えば、ロシア語のчитать（読む）は、「＜本を＞読む（文字で記されたものを理解する）」「＜地図を＞読む（記号で記されたものを理解する」「＜詩を＞読む（＝朗読する）」といった多義性があり、これらは日本語の「読む」でも同様であるが、日本語にない語義として「説き聞かせる」「聴衆に聞かせる」がある。日本語「読む」にない語義には日本人学習者は注意を払う必要があるだろう。このような分析から多義ネットワークはコロケーションの違いとも関わりがある。多義ネットワーク分析をより多くの語について行っていく。

－◆－

『良友』画報と言語 ― 美術分野を中心に

孫　安石／鈴木　陽一／村井　寛志

『良友』画報を取り上げた本共同研究は、2017年、言語研究センターの出版助成を受け、孫安石・菊池敏夫・中村みどり編『上海モダン　『良友』画報の世界』（勉誠出版、2018年）を上梓することができ（本ニュースレターの【言語研究センター叢書】１の紹介を参照）、2018年からは「『良友』画報と言語－美術分野を中心に」というテーマで新たな研究をスタートした。すべての共同研究の活動記録は、研究会HPの http://liangyou.jugem.jp/ に内容を一般公開している。以下、2018年4月以降の研究会の活動を記す。

（１）『上海モダン『良友』画報の世界』合評会（６月９日）の実施

日時：6月9日（土曜）4時～6時

場所：神奈川大学・横浜キャンパス20号館212室

内容：

(1)『上海モダン『良友』画報の世界』合評会

１文学の視点から（鈴木 将久、東京大学文学部）

２地図と場所への視点から

（木之内誠、首都大学東京）

３テーマを限定せず、感想をいくつか

（邵迎建、東洋文庫研究員）

(2) 今後の予定 ― 地図の論考と上海歴史文化事

典の出版について

（２）新着資料の紹介（2018年、7月2日）

◎上海租界工部局 董事会会議録 1854 ～ 1943年

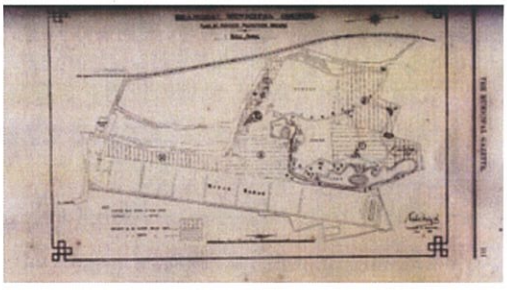
The Minutes of the Shanghai Municipal Council. From Shanghai Classics Publishing House and Shanghai Municipal Archives. Contents: 14,758 pages.

上海工部局の方針決定組織であった董事会の、1854年7月から1943年12月まで会議録。議題は、公衆衛生、交通、通信、郵便、租税、都市計画、ガス供給、街路照明、人力車夫の管理、動物保護、警察等、多岐にわたる。1854年7月から1906年12月までは手書きで、それ以降はタイプ文書。89年間におよぶこの会議録は、湾岸の小都市から中国経済の中心地へと変化をなし遂げた上海はもとより、近代国家建設、国共内戦、日中戦争といった中国の激動の歴史をも反映する資料となっている。

◎上海租界工部局公報

Shanghai Municipal Council: The Municipal Gazette, 1908-1940.From Shanghai Library. Contents: 14,824 images.

上海共同租界の日常問題やインフラを管理した西洋人によって1854年に組織された上海工部局（Shanghai Municipal Council）は、1880年代半ばにはガス、電気、水道等を管理し、さらにはアヘン販売も規制した。Municipal Gazetteは、公式機関紙として1908年から1940年まで刊行された。



（出典：Plan of HONGKEW Recreation Groundの図面、1908年、No18より）

毎週金曜日に発行され、通知、各部門の報告、読者からの手紙、議事録、予算、歳入の月間集計、収入と支出の決算書などが掲載されている。

（３）「円卓会議－中国・上海都市研究の新動向」の実施

日時：2018年11月9日（金）・10日（土）

場所：中国・上海社会科学院

共催：神奈川大学非文字資料研究センター・上海社会科学院歴史研究所・りそなアジア・オセアニア財団

《プログラム》（一部）

【報告】

(1)『良友』画報の論文集刊行後の余談―スポーツとKODAK、そしてShanghai Municipal Council 英文資料について

（孫 安石、神奈川大学非文字資料研究センター研究員）

(2) 上海文化と香港・華僑

（村井 寛志、神奈川大学非文字資料研究センター研究員）

(3)『良友』画報の研究―百貨店

（菊池 敏夫、神奈川大学非文字資料研究センター研究員）

(4) 都市上海の中の創造社作家たち

（中村 みどり、早稲田大学商学学術院准教授）

(5) 中華民国期上海の日本人「戯迷」たち

（森平崇文、神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部准教授）

(6)「中国料理」はいつ生まれたのか ― 人民共和国初期の北京と上海

（岩間 一弘、慶應義塾大学文学部教授）

(7) 上海のキリスト教―戦後、そして現在

（石川 照子、大妻女子大学比較文化学部教授）

(8) 中華民国期の「漫画」と「キャラクター」

（城山 拓也、立命館大学言語情報センター外国語嘱託講師）

— ◆◆　2015－2017年度共同研究グループ　成果報告　◆◆ —

言語景観に関する社会言語学的基礎研究

彭　国踊／尹　亭仁

今年度は、韓国語の言語景観研究に関して、日本における言語景観を韓国語教育に活用する具体的な方法について取り組んでいる。その一環として横浜駅で撮った基本語彙、とりわけ「東」「西」「南」「北」の方向を表わす単語の提示とその活用を試みている。(詳しくは「ニューズレター2018」を参照)今後は日本における韓国語の景観、とりわけ上記で取り上げた漢語を中心に活用法を工夫しつつ、授業での学生の反応なども取り入れながら、研究をすすめるつもりである。

中国語の言語景観研究に関しては、「近代上海言語景観の生態学的類型－ことばの選択、接触とアイデンティティ」「上海の都市形成期における言語景観」と「百年前頃の上海の言語景観の記述研究」という3つのテーマに関する論文を完成し、現在「消えた上海の歴史言語景観(1)－閉鎖型店舗の映像データの記録」というテーマの論文について、データの収集作業を行っているところである。

〔成果一覧〕

彭国躍　2017「上海の都市形成期における言語景観」『神奈川大学 言語研究』 No.40

彭国躍　2017「百年前頃の上海の言語景観の記述研究」『神奈川大学 人文学研究所報』第59号

— ◆◆　2017年度共同研究グループ　成果報告　◆◆ —

中国語教育を目指す日中対照言語研究 －類別詞を中心に

夏　海燕／彭　国躍／加藤　宏紀

類別詞はそれぞれの言語話者がどのように世界を切り分け、カテゴリー化するかを反映し、「人間がどのように森羅万象を認識してそれを名詞に反映させているか（水口 2004)」を表す言語表現とされ、近年注目を浴びるようになった。中国語と日本語には、量詞と助数詞という用語こそ異なるものの、ともに類別詞に当たる文法カテゴリーが存在する。渡辺（1952)、三保（2000・2004）などの先行研究は通時的な考察を通して、日本語の類別詞は中国語から入ってきたものが多いことを検証した。しかし、それぞれ独自な変化を遂げ、その結果、両言語の間にかなりのずれが生じるようになり、かえって習得の難点になる。本研究では、日本語を母語とする中国語学習者を対象に、習得の実態調査を行い、学習者の類別詞習得状況、誤用のパターン及び誤用を招いた要因を究明する。2017年度は本学外国語学部中国語学科2年生から4年生を対象に、同じ課題について作文を書かせ、データを収集するという形でパイロット調査を行った。今後はパイロット調査の結果を基に学生の数を増やして、本調査を行う予定である。また、言語研究の成果を教育現場への還元・応用を目指す。

【　新人所員紹介　】

中国語学科

鈴木（すずき）　慶夏（けいか）　教授

専門は現代中国語文法論です。院生時代は統語論が好きで、樹形図模様のシーツや壁紙がほしいと思っていました。ただ、博士論文で、当時「中国語文法の例外」「修辞や文体の問題」と言われていた、文法上ききわけの悪い現象をあつかったせいか、その後は、語用論や談話文法に興味が移っていきました。最近は、教育上の必要から、教育文法や文法習得に関心が向かい、糸の切れた凧になりかけているかもしれません。この先どうするか、模索がつづくと思います。

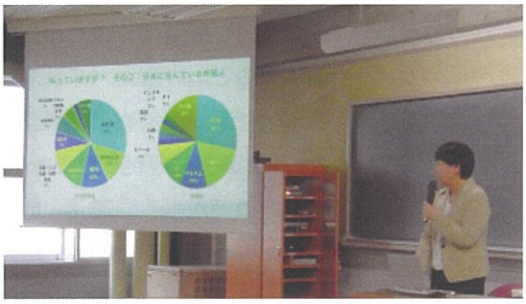
ところで、97年に北京留学中、昨年度退職された松村先生に国際学会でお会いしたので、帰国後博士課程に進学したいと考えていた私は、いま勉強しておくべきことをアドバイスしてほしいとお願いしたことがあります。松村先生は、「今度、僕の学生が北京に留学するので、部屋を見せてほしいから、君がもっていない本を教えてあげよう。」と言って、翌日すんなりと女子寮に入ってこられました。すすめられたのは形式意味論の本で、この分野のことを学ぶ貴重な機会になりました。21年後のいま、この原稿を書いているのも、何かの縁かもしれません。

＊＊＊＊＊ 2018年度　講演会報告 ＊＊＊＊＊

日本社会と言語政策－外国人材の受け入れをめぐって－

講師：松岡　洋子（国立大学法人岩手大学　教育推進機構　教授
文化庁国語審議会　日本語教育小委員会委員）

2019年1月8日（水）10：50 ～ 12:30に11号館21教室において、岩手大学教育推進機構グローバル教育センター教授の松岡洋子氏をお招きして、「日本社会と言語政策：外国人材の受け入れをめぐって」と題した講演会が開催されました。松岡氏は、文化庁国語審議会日本語教育小委員会委員も務められており、今年4月には改正入管法が施行され外国人労働者の増加が予想される今、これに伴って起こる変化、課題、展望についてお話しされました。



講演では、予備知識のない参加者も念頭に、日本の人口や少子高齢化、日本に住む外国人口やどんな人が住んでいるかの話から始められ、政府の方針、外国人が来たらどんなメリット・デメリットがあるか、外国人受け入れに伴う言語政策、言語政策の効果・影響、向かうべき方向の選択などについて分かりやすくお話しくださいました。

最近はニュースでも日本や他国における外国人受け入れの状況についての情報を目にすることが多くなりました。しかし、諸外国がどのような理由で外国人を受け入れどのような政策をとってきたのかという歴史的経緯にまで触れられていることはほぼありません。講演では、日本政府の対応策の紹介とともに、いくつかの国における政策・状況やその変遷についても説明があり、外国人材の受け入れや共生について日本社会がどのような対応をとっていくべきか考える上で非常に参考になるお話でした。　（文責：小松雅彦）

【　神奈川大学言語研究センター叢書１の紹介　】

『上海モダン『良友』画報の世界』
孫安石・菊池敏夫・中村みどり編

『良友』画報研究会・共同研究代表　孫　安石（中国語学科）

2018年　勉誠出版

言語研究センターに『良友』画報を冠した研究会を初めて登録したのが2002年であるので、断続的ではあったが足掛け16年間、『良友』画報に関する共同研究を続けたことになる。

これだけ長く共同研究を続けることができたことには幾つか理由があるが、まず、何よりも『良友』画報の内容の面白さを指摘しなければならない。本書の「序文に代えて」に書いたように、「『良友』画報には、蒋介石や毛沢東が前面に出ることはまずない。その代わりに読者と大衆という言葉が登場し、女性の最新流行を伝える美容室やパーマのかけ方、スカートの丈の長さを紹介する記事が一面を飾るのである。これらの記事を読む時には、一種の痛快さを感じた。そこには政治から解放された人々の生活と娯楽が満載であったからである。」という実感は今も変わらない。

もう一つの理由は、共同研究に参加した多くの研究仲間がいたことである。大学という組織の中で、研究に携わる多くの人々にとって「単著」の刊行は重要な使命（？）であることを否定はしないが、共同研究（論文集）の醍醐味は、また、別のところにあることも認めなければならない。

自分ではカバーできない研究領域があり、知らない分野については相談できる仲間がいる。歴史、法律、文学、音楽、美術、建築、撮影、生活が網羅されている総合雑誌（『良友』画報）であるからこそ意見を出し合い、討論し、思索を深めた成果は、本書の刊行に大いに反映されたと言わなければならない。

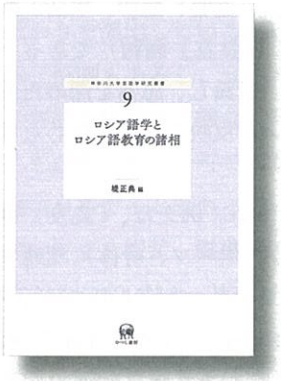
勿論、残った課題は多い。例えば、『良友』画報には1920年代中国のスポーツ、身体に関連する記事が多く掲載されている。当時上海で発行された英字新聞のThe China Press, North China Herald Daily Newsなどにもスポーツ関連の記事が豊富に掲載されており、スポーツと上海、租界、そして、中国人の参加との関係を明らかにする素材を揃えることできたが、今回の論文集では、その詳細を論述することができなかった。また、『良友』画報の記事を、上海の共同租界の工部局が発行した公報Shanghai Municipal Council: The Municipal Gazette, 1908-1940.（From Shanghai Library. Contents）の内容と照らし合わせる作業も進めなければならない。幸い、これら英文の資料は、神奈川大学図書館のDB目録にhttp://go.galegroup.com/gdsc/start.do?p=GDSC&u=kanagawa&authCount=1として公開されており、利用に不便はない。本書刊行と共に、『良友』画報の研究は第二期を迎え、『良友』画報と美術の関連をさらに追及していくことを目指している。

長い間、共同研究を支援してくださった言語研究センター、同僚、共同研究の仲間に謝意を表したい。（なお、本文は、2018年3月に終了した『良友』画報と文学研究の成果報告を兼ねるものである）

【　言語学研究叢書№9の紹介　】

『ロシア語学とロシア語教育の諸相』

堤　正典編（国際文化交流学科）



2018年　ひつじ書房

神奈川大学言語研究センターで長年ロシア語学およびロシア語教育をテーマに共同研究を行ってきた。センターでの共同研究を中心に、同じメンバーによる他のプロジェクトのものを一部含め、またメンバーの「緩やかな共同研究」のものとでもいうべきようなものも加えて、まとめた論集である。書き下ろしの論文の他に、既出の論文も含まれ、後者は若干の訂正をほどこしたものから、ある程度の改稿を含むものまである。著者は編者の堤を含めて５名であり、神奈川大学横浜キャンパスでロシア語を教える者とそこでロシア語を勉強してロシア語の研究を行った者である。

本書は五つの部からなる。第1部「ロシア語文法と意味―体（アスペクト）の問題」はロシア語文法の問題としてアスペクト（体（たい））について論じた2編から成る。1編は述語 мочь のモダリティの意味と動詞不定形の態のカテゴリーの機能について論じ、特定の統語構造においては実現するモダリティに制限があることを明らかにした。もう1編は、様々な言語のアスペクト研究において汎用される「Vendlerの分類」をロシア語動詞について考察しており、他の研究者が論じた分類の適応とは異なる見解を示している。

第2部「ロシア語教育の諸問題―ロシア語学からの視座」はロシア語教育におけるいくつかの問題についてのロシア語学からの考察である。ロシア語の不完了体動詞である接頭辞のない「運動の動詞（移動動詞）」の用法を不完了体動詞の用法と照らした考察、ロシア語の（日本語での）文法形式の名称についての考察、ロシア語の文字の学習についての文字論の観点からの考察、ロシア語学習書における体の意味の説明と提示についての考察、ロシア語学習における「レアリア」の知識のための意味記述についての考察の5編が含まれる。

第3部「ロシア語学習語彙について―語形変化学習との相関」は、ロシア語教育の中でも特に学習語彙の問題を取り上げている。ロシア語の初等学習者に教えるべき語彙と文法の兼ね合いについて論じた2編と、それらをふまえ学習語彙をさらに広げて分析した1編からなる。後者の1編は中上級者の学習語彙を対象とし、用いた資料を改めており、より一般性の高いものとなっている。

第4部「レフ・シチェルバの外国語学習論―ロシア・ソヴィエト言語学の潮流から」はロシア・ソヴィエト言語学におけるペテルブルク学派の重鎮レフ・シチェルバ（Л. В. Щерба 1880-1944）の2つの外国語学習についての論文の翻訳とその解題である。ロシア・ソヴィエト言語学が紹介されることは少ない日本の現状も鑑みて収録した。

第5部「ロシア少数民族言語の研究から―ロシア語とマリ語」はロシア語教育とともにロシアの少数民族の言語の研究を行う中から生まれたる論考である。ここでは印欧語族であるロシア語とは系統的に異なるウラル語族の言語であるマリ語（ロシア連邦マリ・エル共和国）が取り上げられている。そのような少数民族の言語の研究において、あるいは少数民族において、国の最も有力な言語であるロシア語がどのような存在であるかを明らかにするものとなっている。

大方のご批判を頂ければ誠に幸いである。